

初中級の日本語学習者を対象とした PC リテラシー授業の試み

徳永 あかね

1. はじめに

大学進学を目指し、国内の日本語学校や大学予備教育機関で学ぶ日本語学習者を対象とした PC リテラシー教育は、そのカリキュラムを含めて未だ十分な開発が進んでいない。その背景には、対象が日本語学習者でありながら、内容的に語学学習そのものではないことも一因として考えられる。あるいは、現状では周囲の日本語母語話者のなかにも十分な PC リテラシーを持たずに、不自由なく日常生活を過ごしていることも一因に挙げられよう。しかし、国内では国を挙げての IT 政策が進み、教育面でも様々な改善改革が行なわれつつある。近い将来、PC リテラシーはかつての「読み書きそろばん」に類する常識的なリテラシーとなることが予想される。本稿では、まず、こうした PC リテラシー学習の必要性について述べ、大学予備教育課程（別科）において初級から中級の学生を対象に試みた PC リテラシー教育の実践例を紹介する。

2. 「PC リテラシー」とは

日本教育工学会（2000：243-244）によると、PC リテラシーは、70 年代後半のパーソナル・コンピュータ出現に端を発する社会の変化によってもたらされた「社会に求められるリテラシーの一つ」である。この「リテラシー」は言語に関する基礎的な能力を表す用語に由来するもので、すべての人に求められる基礎的な能力を指す。つまり、「PC リテラシー」とは、コンピュータを使いこなせる基礎的な能力と言い換えることが出来よう。

今現在、まだこの用語は一般的に共通理解のもとで使用されておらず、例えば国内の教育行政においては PC リテラシーと情報リテラシーとの差異が曖昧なまま使用されている感がある。そこで本稿では、日本教育工学会日本教育工学会（2000: 243-244、305）の説明を基に「PC リテラシー」を次のように

定義する。

PC リテラシーとは、情報および情報手段を主体的に選択し、活用していくための個人の基礎的な資質である「情報リテラシー」の一部として情報を収集、加工する際に必要なコンピュータ操作、その操作に必要な概念、用語の理解能力を指す。

3. なぜ、授業として必要なのか

ここでは学部を目指す日本語学習者を対象に、彼らに PC リテラシー教育が必要であるとする理由を述べたい。

まずは、国内の教育変革の影響である。昨今の急速な電子化社会を迎える中、文部科学省の指導の下に小中学校では 2002 年度から、高等学校では 2003 年度から新指導要領に基づいた情報教育が実施され始めた。そして迎える 2006 年度は、新指導要領に基づいた情報教育を中学、高校を通して学んだ学生が大学の門をくぐることになる。この年を境に、各大学においても情報教育の見直しが余儀なくされるであろう。このような国内の情報教育をめぐる慌しい動きのなか、学部へ進学する留学生は、高度な情報教育に向けて準備過程を経た一般学生と肩を並べて「情報に関する専門科目」を履修することになる。現状では、留学生以外の一般学生のなかにも十分な PC リテラシーを備えていない者も多いため、留学生特有の問題とは捉えられていないが、国内の小中高一貫した情報教育が推し進められるにしたがって、大学の学部入学時での PC リテラシー格差が顕在化することは想像に難くない。

二つ目の理由として、大学の情報科目の履修以外にもレポートの提出や情報や文献検索など、様々な場面で PC リテラシーが求められるようになってき

ているからである。深澤・濱田・後藤（2005）は、コンピュータに関連した基本的なスキルについては、大学での学習や研究ではもはや必要不可欠なものになっているという調査結果を示し、「情報検索、ハンドアウト作成、など求められているものは自然に身につくものではなく、日本語教育の場を利用して指導する必要がある」（2005:188）と指摘する。

最後に、日本語学習者の場合、母語で身に付けている母語環境での PC リテラシーと、日本語環境での PC リテラシーを分けて考える必要があるからである。進学を目指す学習者の大半を占める出身国である中国、韓国では、国家を挙げての IT 化は日本を凌ぐ勢いで進んでいる。そのため、母語環境で高度な PC リテラシーを身に付けて来日する者も多くなってきた。しかし、母国で身につけてきた PC リテラシーを日本語環境で発揮するには日本語能力の伸長のみに頼っては解決出来ないことが示唆されている（徳永 印刷中）。

他にも、日本社会で意識改革が進みつつあるネチケットを日本社会で生活していく社会常識として系統的に学ぶ機会が大切である。十分な日本語運用力があるにもかかわらず、知らないが故にネット社会のルールを逸脱すれば信頼を失うだけでなく、意図しない行為によって犯罪者に、あるいは逆にネット犯罪の被害者にされてしまう危険性もはらんでいる。

以上のような理由から、語学の習得を目的とした日本語授業とは別に PC リテラシーの習得を目的とした授業が必要なのである。

4. PC リテラシー授業の実際

表 1、2 は学部進学を目指す大学予備教育における PC リテラシー授業のカリキュラム例である。初級 1 は、日本語学習暦 150 時間～200 時間程度、中級 4 は日本語能力試験 2 級レベルの学生を対象として実施した。

授業は、大きく 2 つの流れから成る。一つはメール交換、掲示板交流など、PC を媒介としたコミュニケーションを中心とし、実際のコミュニケーションを体験しながら、必要なマナーや表現形式を学ぶものである。今一つは、ホームページ、パワーポイント作成、アンケート調査、レポート作成など、調査した結果をまとめる方法を学ぶと共に、インターネット検索、写真などの画像処理を通して著作権法

を中心としたネチケットを学習する。また、アンケート調査を依頼する際のマナーやデータの扱い、メール文書表現もこれに付随して学ぶ。

4.1 メール交換・掲示板交流

初級前半（表 1）の学習者の場合、使用できる日本語も限られているため、「お互いの学習言語」を使ってのメール交換を行なう。例えば、韓国出身の学生の相手は、韓国語を学ぶ学生、という組み合わせである。ここでは授業でメールの雛形を提示し、それを元に各自でメールを書いて送信する形をとっている。今学期は、英語圏の学生へは日本人学生ではなく、英語を学習し始めた学部留学生との組み合わせを行なった。また、初級後半、中級前半のクラスのメール交換では、メーリングリストを使用し行なう。1 グループ 4、5 人ずつのメーリングリストのグループを作り、教師は全グループのメンバーの一人として登録し、メールのやり取りの様子がわかるようにする。中級後半（表 2）では、web 上に設けられた掲示板を使用し、他大学の学生と意見のやり取りをしたり、他大学の教員宛にメッセージを書くことを行なう。

4.2 調査発表のためのファイル、レポート作成

ここでは、学部進学後に課題やプレゼンテーションの機会に必要とされる PC リテラシーを中心に学習項目をたてている。これらの学習をするには日本語の運用力も必要となる。そこで、初級から中級にかけて、日本語運用力が上がるにつれて、プレゼンテーションの内容を画像依存から日本語依存へとシフトされる。

ホームページやパワーポイントでは、画像の著作権について、また、アンケート調査やレポート作成は、引用や参考資料の著作権について配慮することを課題としているが、実際にどこまで配慮するかは出身国での著作権に対する考え方のみならず、個人差が見られる。

PC リテラシー授業では、プレゼンテーションに必要なファイルを作成するまでを目的とし、実際の口頭発表の仕方については、日本語の授業ほど重きを置かない。

4.3 文書作成練習

4.1、4.2 で紹介した 2 つの大きな授業の流れとは別に、学部進学後に使用頻度が見込まれる word や excel などのアプリケーションを使った文書作成練習を組み入れている。出身国において操作に慣れて

いる者であっても、母語環境での操作と日本語環境での操作との違いがある。それと同時に、名刺、履歴書など、母国とは異なる日本社会での慣行についても教える。

表 1. 初級 1 の授業内容 (1 学期)

1	オリエンテーション 入力練習(練習シート、時間割作成) メール基本操作	WORD基本操作、半角、全角、文字種変換など アドレス帳、送信名
2	入力練習、(名刺作成) メール送信練習	フォント、ルビ
3	文書作成練習(外来語) メール送信①(自己紹介)	表の作成
4	文書作成練習(パーティの案内作成) メール送信②	図形挿入、地図作成、印刷レイアウト
5	デジタルカメラ メール送信③	デジタルカメラ操作、用語
6	文書作成練習(新聞作成)	テキストボックス、縦書き、画像編集
7	表計算導入 メール送信④ メールの顔文字	EXCEL基本操作 顔文字の意味、使い方
8	文書作成練習(アンケート用紙) 表計算導入	インデント、タブ設定 表、グラフの作り方
9	文書作成練習(アンケート結果レポート) 表計算(集計、グラフ作成) メール送信⑤	下線、文字囲い、グラフ挿入 表、グラフ作成練習
10	ホームページ導入 メール送信⑥ 著作権法について	リンク、拡張子、ホームページ基本
11	ホームページ作成	フリー素材、インターネット検索、背景
12	ホームページ作成(完成)	
13	クラス内発表	

表 2. 中級 4 の授業内容 (1 学期)

1	オリエンテーション メール文書 コンピュータ用語	相手に応じたメールの書き方、件名の付け方など コンピュータの基本的な用語の日本語(片仮名用語)
2	メール文書 コンピュータ用語 PCカメラ操作	メールの表現、形式など
3	メール文書 ビデオレター作成	PCカメラを使って自己紹介のファイルを録画。
4	掲示板メッセージ投稿 ビデオレター投稿 レポートのテーマ設定	掲示板について。アイコン作成。
5	掲示板メッセージ投稿 情報検索について	自分が知りたいテーマについての検索方法
6	情報検索について 文献シート作成	情報の信頼性の見分け方 集めた情報の整理方法。
7	掲示板メッセージ投稿 ハンドアウト作成	自分が取り組むテーマについて整理する
8	レポート中間発表会	自分が調べたいテーマについてお互いに発表し、テーマを絞り込む。
9	掲示板メッセージ投稿 レポートのアウトライン	レポート執筆の準備。
10	掲示板メッセージ投稿 レポート作成 引用と著作権法	引用の仕方、著作権法に関する注意。
11	レポート作成	
12	レポート作成	
13	発表会	

5. 授業実施の留意点

以上、本稿では 2001 年より過去 5 年間、試行錯誤を続けている授業の試みを紹介した。これまでの経験を踏まえ、PC リテラシー授業を行なう際に特に留意しておく点として、「達成課題に対する評価の個人差」「他科目との棲み分け」「学習者へ授業の目的を理解させる」の 3 点が挙げられる。

(1)達成課題に対する評価の個人差

母語環境での PC リテラシーと日本語環境でのものとは同じように発揮できないにしても、やはり母語環境で高い PC リテラシーを持つものは、日本語環境でもある程度の PC リテラシーを保持できる。そのため、PC リテラシー別のプレースメントテストによるクラス分けが行なわれない限り、一クラスのなかに母語での PC リテラシーの開きがある場合が多く、短期間の学習ではその差を縮めることは難しい。そこで、授業で課した課題を評価する際、その背景にあるももとの PC リテラシーの個人差を切り離れた評価が求められる。

(2)他科目との棲み分け

母語話者を対象とした PC リテラシーの授業とは異なり、日本語学習者を対象とする場合、そこで用いられる日本語自体がまだ習得過程であるため、その指導にも力を入れたい。しかしそれでは限られた時間のなかで PC リテラシーまで教えるのは難しい。従って、文法の誤りや発音、発話の誤りに対する指導は他科目に委ね、あくまで PC リテラシーの習得を授業の中心に据えたクラス運営が求められる。

(3)「学習者へ授業の目的を理解させる」

前述(2)にも通じることであるが、教師だけでなく、学習者自身にもこの授業の目的が日本語習得ではなく、PC リテラシーの習得であることを十分に理解させておくことが大切である。しかし、日本語学習者達は、目下の関心事は日本語上達で

あり、大学進学後に必要とされる能力を高めることへの関心は薄いのが現状である。まして、メール交換やインターネット検索など、日常のコミュニケーションレベルで必要とされる PC リテラシーを備えている場合、大学進学後に学ぶ情報科目に必要な PC リテラシー学習への動機付けは難しい。学習しないことでどのような点で不利となるのか、などの具体的な例を示し、学習動機を意識的にしていく必要がある。

6. 終わりに

日本語の教育現場でメール交換やインターネット検索などのコンピュータ操作が授業に取り入れられることは、確かに以前に比べると増えてきているが、日本語能力伸長に重点をおいたものではなく、「大学その他の高等教育機関で情報に関する専門科目を学ぶための準備」の「リテラシー」として教えているケースはあまり見られない。今後は、授業シラバスの評価や検証をすると同時に、機関を越えたネットワークで教材や情報の共有をはかっていく必要があると考える。また、留意点でも述べたように、学習者自身への動機付けのためにも、学部で学ぶ留学生の PC リテラシーをめぐるトラブルの実態調査も今後は必要であると考える。

参考文献

- 徳永 (印刷中) 「留学生の日本語環境でのコンピュータリテラシーに関する一考察～中国系留学生の英語能力とコンピュータ用語理解より」『日本語教育』128号, pp100-109.
- 日本教育工学会編 (2000) 『教育工学事典』, 実務出版
- 深澤のぞみ・濱田美和・後藤寛樹 (2005) 「留学生に必要な情報リテラシーとはどのようなものか」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, pp.183-188.

とくなが あかね / 神田外語大学 留学生別科
akane@kanda.kuis.ac.jp